
一日 2 3 時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。

音無和哉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。

【Zコード】

Z2302Y

【作者名】

音無和哉

【あらすじ】

8月と契約している高校1年生の燕去雁来は、契約を果たすため何だかよく分からぬモノと徹夜で戦う仕事をしていた。

そんな雁来の一番の楽しみは、後ろの席の氷姫、仲春闇と話すこと。
話さない、笑わない美少女、“氷姫”は雁来とはよく話すしよく笑う。

そんなある日、6月の契約者である学年一の美少女涼暮鳴神と仕事をしているとき、見たこともない敵が現れる。

戦っている最中、結界が張られているはずの扉が開き仲春が現れる。

私の時間を返して。

これは何のために戦っているのか分からい少年と、時間を取り戻すため戦う少女の物語。

「一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょ。」

葉月の契約者と氷のお姫様

暦の契約者

12人がそれぞれの月と交わした契約。

契約によって得られるもの、武器と能力。

契約によって縛られるもの、「戦」。

契約は世襲される。

契約から逃げる事はできない…

「… わ。起きろー。燕去…」
「… わ。起きろー。燕去…」

笑い声と怒鳴り声？

俺の名前が呼ばれたような…

「こひつー。」

急に頭上に痛みが走った。

「いてつーじゃない！今、授業中なんだけど？」

顔を上げると、確かに古文の担当の教師が俺の席の前に立っていた。

古文とこひつーとは、おそらく午後の最後の授業だろう。

「すいませ…」

「お前なあ、何回田だ？他の授業でも寝てるって聞くぞ。夜更かしして何やつてんだか。」

あきれたようにそのままの教師は教卓に戻つてこく。

夜更かしお前らの安全を守つてやつてるんだよ…

俺は、授業に集中できんつにないが、だからといって今寝る度胸はないので外を見ることにした。

いつこいつと一緒に窓際の席だと便利だなど、感じぬ。

俺には秘密がある。

国家級の秘密。

「見た田は子供、頭脳はなんとか」みたいな感じで、表面上は普通の高校一年生を装つている。

本業は一応靈祓師っぽいものだ。
ぽいものであつてソレではない。

実際俺には、いや俺達には何を祓つてしているのか、なこと戦つているのかすらわからない。

「つばめぐーん、いつしょに帰りましょ」

気が抜けるような甘ったるい声が聞こえてきた。

「あ、？」

「やだーつばめぐん、こわーい。」

数人の女子が固まつて俺の席の周りにきていた。

「うやら、ボーッとしているうちに授業ビデオかHRも終わっていたらしい。」

「ねえねえ、由美ね今日カラオケ行きたい。」

「それ、いいね。つばめぐんも行こうよ。」

うぜえ。

「そうだあ。カラオケ行くんだつたらあ、そのあとせあー

ガタツ

後ろの席で結構大きな音がした。

「感じわるつ。」

「ねえー、ちょっと可愛いからつて調子のつてんじやね？」

俺の周囲にいた女子達は、俺の後ろの席の住人を罵りながら、教室

の外に行つた。

「さんきゅ。助かつた。」

俺は後ろの席に礼をいう。

「別に、君を助けたわけじゃない……」

そう返される。

このやり取りは毎日やっている。

最初は、ただ音をたててしまつただけなんだと思つていたが、どうやら後ろの席の美少女はいいやつらしく、俺が困つているのを知つて女子を追い払つてくれているらしい。

「でも、助かつたからありがとな^{なかはる}仲春。」

「嫌なら嫌つてはつきり言つたほうがいいと思つ。」

^{なかはる}仲春は長い髪を手でかきあげながら言つた。

「言つたいんだが、あいつらって日本語通じるのかわからなくて、通じなかつた場合俺が痛いやつに見られるじゃないか。」

仲春はクスッと笑つた。

「確かに、日本語通じない人に一生懸命話しかけてたら痛い人ね。」

本当は嫌つて言つてしまつのが早いとは分かっているんだが、俺は

仲春としゃべるのが嫌いじゃない。

いや、むしろ好きだ。

だから、あいつらに絡まれなければ仲春と話すことも無くなるわけであつて、あえてアイツらを追い払わないでいる。

「雁来^{かりき}、帰ろう。」

仲春と話していると、後ろから声をかけられた。

茶髪のツインテールにパッチリした大きな目、学年で一番可愛いとまで言われている少女、涼暮鳴神^{すずくねなるかみ}。

いわゆる幼馴染というやつで、いつも俺と一緒に下校している。

「ん、じゃあな仲春。」

さつきまで笑っていた仲春が、無愛想な顔になる。

「ええ。」

「雁来^{かりき}つて仲春さんと仲いいんだね。」

帰り道、鳴神がふと思いついたよつて言つた。

「別に普通だろ?」

「えー普通じやないよ。『氷姫』仲春聞つて有名じやん。あんまりしゃべらないし笑わない、氷のお姫様。」

氷姫なら俺でも知つてる。

だが：

「仲春は人並みに喋るし人並みに笑うやつだろ。」

「だ・か・ら、それって雁来にだけなんじやない? やつぱり仲いいんだ。」

「へーへーそーですね。」

「ふうー。」

鳴神は頬を膨らませた。

「あつ、そりだ。今日つて雁来、仕事の口?」

「ああ。お前なるかみもだろ?」

「うん……」

部屋のデジタル時計が21：00と表示された。

「行きますか……」

俺は部屋をでて、廃ビルの屋上を手指した。

「ジルがこの町で一番高い建物だから、町を一望できる。

「おさかつたね、雁来。」

屋上に着いたとき、すでに鳴神の姿があつた。

「お前が早いんだろ。」

鳴神は口角を上げてにっこり笑つた。

「じゃあ、行くよ。」

「ああ。」

「我、葉月の契約者、燕去雁來。契約に答えよ！“力”の名の下に
“勇気の剣”を！！」

『 契約に答えよう。お前に剣を。』

「我、水無月の契約者、涼暮鳴神。契約に答えよ！“恋人”の名の
下に“魅力の銃”を！！」

『 契約に答えましょう。あなたに銃を』

俺の手には紅く光る剣が、鳴神の手には桃色に光る銃が、握られる。

これが契約。

「雁来、勝負よ。」

「ああ。」

「「レーティゴー！」」

俺と鳴神は一斉にビルの屋上から飛びだした。

俺は東に、鳴神は西に。

「さつそく見つけた。」

黒く、黒く、闇のような物体。

それがなんのか分からぬが、とにかくコイツを倒せばいい。

楽なことにコイツはとても弱い。

弱いのだが、いるだけで人間の害になるらしい。

いくら弱いと言つても、普通の人間には見えないし、見えたとしても攻撃できない。

だが、俺達契約者の武器でちょっと攻撃すればすぐに消滅してしまう。

俺は、そいつに向けて剣を振るつ。

『ギヤー』

「1対3つと。」

その後も俺はそいつらを見つけては消滅させた。

2・30

廃ビルの屋上に戻る。

すでに鳴神の姿がある。

「俺は65体。」

今日、あいつらを何体倒したのかを報告する。

「うう…あたし64体。」

「今日は俺の勝ちだな。」

「先週はあたしの勝ちだった！」

「だが、今日は俺の勝ちだ。すべひべ言わずトントンカツ君買つて来い。」

賭けていたトンカツくんの話でもりあがつていると、急にあたまに武器が話しかけてきた。

『契約に基づき命ずる。戦闘準備を。』

「雁來……」

「ああ、わかつてゐる。」

この時間になつても動けてゐやつはかなりしぶとい。

あいつらの動ける時間は大体21・30～2・00の間だ。

たまに、それ以外でも動けるやつらがいて、ものすくく迷惑だ。

「次来るやつがあたしが倒したら同点ね。」

よつぽどトーンカツくんをおじりたくないらしい。

「ああ、割り勘ですましとやるよ。」

「ははっ。」
「解。」

『契約者みーつけた』

「……え？」

感じる存在感、気配、全てが今まで戦つてきただあいつらと同じもの
なのに……

そこつは……

「人間……？」

人とまったく同じ形をしていた。

俺達より少し年上ぐらいの女性の姿。

『残念。私は人間ではないわ。』

「敵よ……ね？」

鳴神が俺に視線を送つてくる。

わからない……。

今まで戦つてきたあいつらは30センチほどまるい塊だった。

人間の姿をしたやつなんて一体もいなかつた。

『そうね、私は敵よ！ハアッ！！』

敵と名乗った女性は俺達に向けて札を飛ばしてきた。

俺と鳴神は瞬発的に飛翔系の術を使いそれをよけた。

俺達がもといた場所を振り返り見てみると、燃えていた……

「マジかよ……」

「雁来……！」

「え？」

前を向くと、田の前に女性の姿があった。

『戦つてゐる最中に敵に背中を見せちゃだめよ。』

女性は俺に雷系の札を貼つたのだろう、体中を電撃がはしる。

俺はビルの屋上に墜落した。

「雁來！——！」

鳴神の悲鳴が聞こえる。

געריג

自分で思つたより流血しているみたいだ……

本当は戦いたくなんかないのに……

「**契約に答えよ**“**恋人**”の名の下に…」

遅い！

「鳴神！！！！！」

戦いたくないなんていつてる場合じゃない。

戦わなきや殺される。

「契約に答えよ“力”の名の下に我、紅蓮の炎を欲する……“勇氣”的剣”を炎で纏え！！」

『 契約に答えよう。お前に炎を。』

俺の剣が燃える。いや、炎をだしている。

「はああああああつ……！」

女性のところまで飛び、剣を振るひ。

『ギャ――――――――』

「うわあ……！」

皮膚のこげたにおいがする。

嫌だ！

俺は人を殺したくない……………。

キ

屋上の扉を開ける音がした。

「誰……？」

屋上には結界を張つてあつて普通の人間が入れないよつとしてある。

他の契約者か？

「……なさい…………返しなさい…………私の時間を返しなさい…………」

この言……

俺は、敵に背を向けることになるが、振り返る。

そこにいたのは……

「仲春…………」

俺のクラスメイトで後ろの席。

氷姫こと仲春闇だった。

一田が一時間少ないお姫様

「私の時間を返しなやこよ……！」

『俺が振り返るとそこには仲春の姿なかはるがあった。

』これはこれは、23時間のお姫様。

「私の時間、返してやー。」

仲春は叫んでいる。

「23時間のお姫様……？」

俺がそうつぶやくと仲春が俺の存在にやつと気づいたみたいにこういちを向いた。

「燕去つばめよ……？」

『8月の契約者、何度同じことを言わせるのかしらへ。』

正面には敵の姿。

なんといつゞジャブだらづ。

また、敵は札を構えている。

さすがに、今墜落したら仲春も巻き込んでしまつだろう。

しょうがない。

「我、葉月の契約者。 契約を果たす！――！」

『契約に答えよう。お前に契約を果たすだけの力を。』

「はああああああああああああああああああああ――！」

俺は力いつぱい炎が纏つた剣を敵に振るつた。

『ギヤ――――――――――』

女性から血があふれ、地面に墜落する…

「仲春――――！」

「大丈夫だよ。」

答えたのは仲春ではなく、仲春を抱えた鳴神だつた。

俺は地面を見た。

俺が斬つたんだ…

無残な光景。

キモチワルイ。

『よくも、よくも――――――――――』

女性が動じつとする。

：だが、やはり傷が痛むのだろう一行に動かない。

「降ろして。」

仲春が鳴神に言ひ。

「……うん。」

俺と鳴神は女性が倒れている屋上に降りた。

降りたとたん、仲春は女性に近づく。

「おい、仲春ー。」

仲春は俺の言葉を無視して女性に近づく。

「質問よ。あなたはクロノス？」

無愛想な声で仲春が聞く。

『　いいや、私はお前の時間を奪つたやつではないよ。』

「そう、じやああなたに用は無いわ。封印させてもいい。」

『　23時間の姫君。出会えたなら、クロノスによろしく伝えてくれ。』

『

仲春は頷いた。

「闇を囮むのは私。私を囮むのは光。私は光に捕らわれよ、ならば闇は私に捕らわれよ！封印！！」

あたり一面が光、目を閉じてしまい、俺が目を開けた頃には無残な姿の女性は消えていた。

「仲春、お前は何者だ…？」

「私は…」

仲春は俺の質問に答えようとしない。

「燕去」を何者なの？」

「俺は…」

同じじとりで言ことじまつてしまい、俺達は顔を見合させて笑った。

「俺は暦の契約者って呼ばれてる。俺の先祖が8月、葉月と契約してからずっと俺の一族は契約を守って変なやつらと戦ってる。んで、戦う代わりにこの剣と炎を自由に使わしてもらつて契約。」

まあ、簡単に言つとこんなもんだる。

「私は一応結界師つて職業。うちも先祖から続いてる。狂った神様とか靈を祓つてる。」

仲春は自分が戦ってるもんが何かを理解しているのか。

「23時間の姫つてのは？」

「…私には1日が23時間しかないの。昔、一時間取られちゃったの。」

「一日が23時間しかない？」

意味がいまいち分からない。

あれか、1時間ずっと寝てるとかか？

「えつと…？残りの1時間はどうしてるのかな？」

口を開いたのは鳴神だった。

鳴神もびつやけに引っかかつたらしい。

「私はこの世界から一時間消えているの。」

「？」

「他の人たちが世界中を探しても一時間、私はどこにもいない。世界から消えているから。」

「えつと、つまり一時間ぼっかりお前がいないってことか？」

「そういうこと。どこで何をしているのかはわからない。私にも記憶が無い。気づいたら一時間たつててる。」

「それって……つらくないか？」

仲春はつらそうな顔を一瞬して、笑顔を作つてこうつた。

「つらいよ。だから、どんなことをしても取り返すの。」

「取り返す？」

「ええ。私から時間をとつた、クロノスから。」

「クロノスって時間の神か？」

「うん。時間の神、クロノス。昔ちょっと色々あってね。」

時間の神、クロノスは俺たちともかなり関係が深いと聞いたことがある。

聞いただけで、どう関係があるのかは知らないけど……

「お前はこれからも一人でクロノスを探すのか？」

「うん、それしかないから。」

「俺が一緒に探してやるよ。」

「え？」

それが俺が戦う意味になれば……

「さつきみたいなのがまた出てきたらお前がいてくれると助かる。お前も戦闘能力はそんなになさそうだし、利害は位置していると思うけどな。」

「そうだね、契約者全員と利害関係は一致するわね。あたしは賛成かな。」

「じゃあ、お願いしようかな。」

「じゃあ、これからよろしくな。」

「ええ。」

23時間の孤独な姫は仲間を手に入れましたとさ。

さあ、あと何日で終わってしまうのかな？

黒いマントを羽織った男性が姫と契約者の取引をあざ笑うかのように、遙か上から眺めている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302y/>

一日23時間の君へ、紅蓮の剣を捧げましょう。

2011年11月5日03時15分発行